

# NEWS きのくに

GREEN COMMUNITY COLLEGE

Vol.12[1]

2009(新春号)



## きのくに活性化センター

発行責任者／中田肇 発行日／2009年1月20日  
〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9  
和歌山県立 情報交流センター ビッグ・ユー内  
TEL&FAX0739-26 9670  
<http://www.aikis.or.jp/~aoi-ki/>

## 2009年の始まりにあたって

あけましておめでとうございます。

きのくに活性化センターが設立されて8年目を迎えます。昨年も市町村などの委託事業を中心に各地の地域づくりや街づくり事業を支援し多くの成果を挙げることが出来ました。このように順調に事業を進めることができましたのも和歌山大学をはじめ、地域の関係機関の皆様方の温かいご支援の賜物であり厚く感謝申し上げます。

きのくに活性化センターは、紀南の豊かな自然や歴史、文化等の地域資源を活かし、地域の活性化を目指すことを目的に、和歌山大学、県、田辺・新宮の自治体と田辺・新宮両商工会議所及びJA紀南などが参画した紀南地域における初めての産・官・学の連携組織として、平成14年4月27日に誕生いたしました。

以来、「紀南の地域づくりと地域をつくる人」、「女性が語る紀南の地域づくり・人づくり」など様々なシンポジウムや講演会などを開催し、特に高校生など若い世代や女性による地域づくりの課題研究やその役割の啓発を行うなど、新たな視点からの人材育成事業を実施してまいりました。また、委託事業では、串本町・古座町・古座川町の「新しいまちづくりの提案書」をはじめとして、熊野川地域、北山村、田辺市、新宮市など、それぞれの地域に密着した課題に取組み、発足以来24件の事業を実施することが出来ました。中でも、平成18年度、経済産業省より「工業立地適正化等調査事業」を受託し、「田辺広域市町村圏産業振興ビジョン・アクションプラン—健康と観光を軸とした産業クラスターの形成をめざしてー」を策定し、地域発展のための基軸づくりとして様々な事業を提案したことは、きのくに活性化センターの機能と役割を十二分に発揮できたことだと思います。

高速道路の南進整備や行政合併の更なる推進など社会基盤の整備が進む一方、地場産業や地方商店街の衰退など地域間格差の拡大がより一層顕著な今日、紀南地域が直面する様々な問題にたいし、大学と自治体、企業、地域住民等とがより一体となっての取組みが一層必要であり、その上で、きのくに活性化センターの果たす役割も益々大きいものと考えています。

本年も、関係機関の皆様方と共に一層の連携を図りながらきのくに活性化センターの運営に努めてまいりたいと存じますのでよろしくお願い申し上げます。



きのくに活性化センター  
中田肇会長

## CONTENTS

- |                                  |    |
|----------------------------------|----|
| ●2009年の始まりにあたって 中田肇会長            | 1面 |
| ●フォーラム「茶人・川上不白が発信するもの」から         | 2面 |
| ●農商工連携による「地域産業複合体」の形成と拡充を 橋本卓爾教授 | 3面 |
| ●『熊野』と自然エネルギー 中村太和教授             | 4面 |
| ●地域の知恵に学び、地域を守る 原和男氏             | 5面 |
| ●時代小説から読み解く江戸と新宮 山本一力氏           | 6面 |
| 「熊野地域検定」テキストブック作成へ               |    |

# フォーラム「川上不白が発信するもの」から

新宮商工会議所大會議室より  
2008年11月15日

きのくに活性化センターは、フォーラム「川上不白が発信するもの～熊野からのまなざし・江戸からのまなざし～」を2008年11月15日に新宮市井ノ沢にある新宮商工会議所大會議室を会場に開催した。フォーラムには、江戸千家宗家川上紹雪副家元、岐阜大学教授森田晃一氏、熊本大学准教授岩崎彦氏の3人が出席し、きのくに活性化センターの鈴木裕範事務局長をコーディネーターに講演とパネルディスカッションを開いた。

ふるさと新宮と活躍の舞台となった江戸という二つの地域から不白という人物像に迫ろうという試みで、没後200年になる不白に関するフォーラムが新宮市で開催されたのは初めて。会場には佐藤春陽新宮市長をはじめ地元の茶道関係者や市民ら約90人が訪れ、パネリストの話に聞き入った。要旨を紹介する。

**鈴木** 不白の茶の道統を受け継ぐ副家元は、その茶の湯と心についてどのようにお考えか。

**川上** 不白の人物像を残された作品から推し量ると、豪放で力強い一方ハイカラで、新しいものを追求したすがたがうかがえる。さらに手造りの茶碗や香合には洒脱さがあり、幅が広い。

不白の茶には、多様性があったと思う。多様性があれば多くの人に受け入れられる。当時江戸の茶道は徳川家をはじめ多くの大名が石州流(大名茶人・片桐石州)だった。そこに、町人のお茶である千家のお茶を京都から持ち込んだのが不白。苦労のすえ行き着いたのが多様性ということであり、それは、今日の茶の湯の発展の礎となる大事なものだったと考えている。

私たちも自由な発想、価値観をなくさないようにしたい。それが不白の教えだと思っている。

**鈴木** 森田さんは、都市・江戸と不白について研究をされているが、その立場から、また不白の活躍を可能にしたものについてお話しeidいただきたい。

**森田** 不白が活躍したのは18世紀後半の宝暦・天明期という江戸らしい文化が花開いた時代だった。不白は、こうした都市江戸の特性をよく咀嚼し、千家の茶に創意工夫をくわえて各階層に広めていったのではないか。都市江戸の地域性、時代性、そして不白の才知・才能・魅力の3点が活躍を可能にした。それを支えたのが、8代将軍徳川吉宗以降の江戸における紀州人脈の存在だ。それを基盤に門人ネットワークを推進し、的確に活用して

千家の茶の湯を展開していく能力を持っていた。時代を選びとり飛び込んで行く、こうした才能が不白にはあった。グローバル化が進む今日、不白が江戸で行ったことは一つのヒントになる。

**岩崎** 水野家が江戸千家の宗匠を寵愛したこと大きい。

**鈴木** 不白の根強いエネルギーの源泉に、紀州人気質や背景としての熊野という風土があるのではないか。

**岩崎** 熊野の自然と古代信仰は、熊野に生きる人たちの生きる支え、強さになっている。こうしたものを、不白も身につけていたのではないか。そして大事なことは、海上交通の時代、新宮は幹線

ルートにあたっていたということだ。幹線の大動脈にあたり本当に近い、江戸は新宮人にとってなじみの深い土地だったのでないか。江戸の文化が新宮に入り込んでいただろうことは想像に難くない。江戸時代は、紀州全体が江戸に

近かったのだと思う。

**鈴木** 現代における新宮人の東京志向、モダンさの根っこは、不白の時代に遡れるといえそうだ。地方都市・新宮を取り巻く状況は厳しい。そのなかで自信と誇りを取り戻すことが重要だ。江戸という新天地で新たな道を切り開いた不白は、ふるさと新宮にとっては地域を考える最高の人物だといってよい。今日その精神や生き方に学び、まちづくりに活かしていく必要があるのではないか。地元は、もっと不白について語る必要がある。



フォーラム風景。左から岩崎、森田、川上、鈴木の各氏

# 農商工連携による 「地域産業複合体」の 形成と拡充を



和歌山大学経済学部教授 橋本卓爾

## 急務となっている 地方都市・農山村の 再生

地方都市・農山村の衰退が語られ、その再生・活性化の緊要性が叫ばれ始めてからかなりの期間が経つが、いまほどこの課題が切実になっている時はない。それは、同地域が①農林水産業や地場産業の衰退による経済基盤の弱体化、②「公共」、しかも身近な「公共」の縮小による住民の生活困難、③少子高齢化・過疎化による地域の維持・管理機能の低下、④自然環境の悪化や原風景の劣化、鳥獣害被害の拡大等という「四重苦」のもとで苦しんでいるからである。いまや、地方都市・農山村の再生は、“またなし”的段階にある。

## 「地域産業複合体」の 形成と拡充を

こうした厳しい現状にある地方都市・農山村の再生・活性化を図っていくためには、なすべき課題と対策は多々あるが、やはり基本は産業の確立による経済基盤の拡充・強化である。その際、重視すべきことは産業の地域内連携の促進である。

近年、農業、中小企業、地域経済の後退や衰退が顕在化し、深刻化しているもとで、農業や中小企業の再生、地域の活性化をめざした様々な実践が展開されているが、こうした取り組みのなかで地域内において農業、工業、商業、観光業等が相互に連携・結合して地域循環型経済を形成し、地域活性化に重要な役割を果たしている事例に注目が集まりつつある。筆者はかねてからそのなかでもとくに地方都市・農山村においては、「農業を基軸とした地域産業複合体」、すなわち農業を基盤に、それが産出した農産物の加工業、その製品の販売にかかる卸・小売業、さらには農業のもつ多面的な機能を生かした観光・サービス業等が地域内で連携・結合することの必要性とそれが地域社会・経済に果たす役割の重要性について論及してきた。

農林水産業や地場産業をめぐることのほか厳しい情勢は、これまでのように農業は農業、地場産業は地場産業、商店街は商店街といったバラバラな対応を許さなくなっている。地方都市や農山村の基礎的産業である農林水産業や地場産業が持続的発展していくためには、同地域の各産業・業種が孤立・分散的に存在する

のではなく、連携・結合して地域産業複合体を、とりわけ「農業を基軸にした地域産業複合体」を形成し、さらにそれを拡充させていくことが強く求められている。

こうしたもとで、昨年(2008年)農林水産業と商業、工業等の産業間での連携促進によって地域経済の活性化を図ることをねらいとした「農商工等連携促進法」(中小企業者と農林漁業者との連携による事業活動の促進に関する法律)と「企業立地促進法改正」が制定され、施行されることとなった。国の産業政策においてやっと農業と他産業との地域内連携の促進が打ち出された意義は大きい。同法では、「地方を中心に元気を取り戻し、活力ある経済社会を構築するために、地域経済の中核をなす中小企業者と農林漁業者の活性化を図ることが重要」とし、そのためには「中小企業者と農林漁業者が一次、二次、三次の産業の壁を越えて有機的に連携」することの重要性を強調している。それだけに、「農商工連携促進法」等を活用して地域内で農商工の連携を推進し、地域の実態に即した多様な「地域産業複合体」を形成・拡充していくことがますます必要になっている。



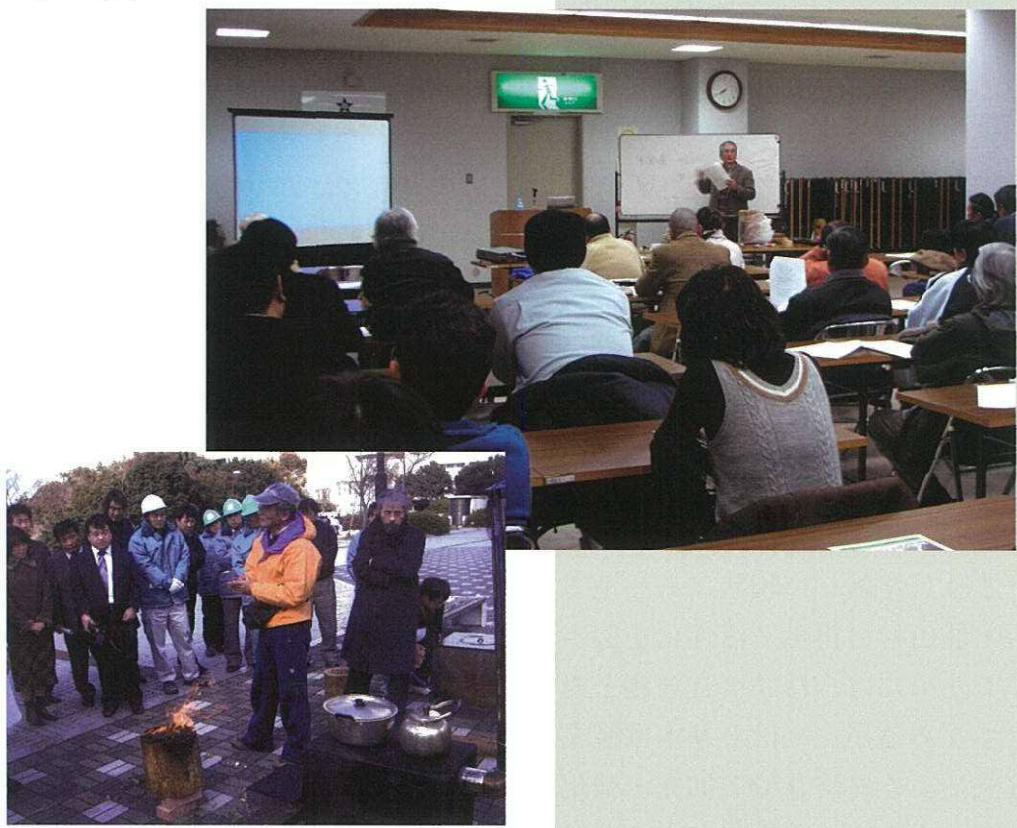
和歌山大学経済学部 中村太和

地球レベルで環境問題が深刻化し、石油資源の枯渇が「ピーク・オイル論争」として現実化するなかで、これまでのような化石燃料の大量消費を前提にした大量生産・大量廃棄の生産・生活システムが限界にぶつかっていることは誰の目にも明らかになっています。そこから脱出する方策として世界的に再生可能な自然エネルギーに関心が集まり、とりわけヨーロッパでは温暖化対策の柱として大規模に進められています。自然エネルギーとは要するに太陽・風・水・バイオマス(生物資源)など、地域に普遍的に存在する自然資源そのものです。

太陽については、太陽光発電だけでなく太陽熱利用が今後本格的に進められていきますし、水力発電については、ダム建設の必要がない小河川や上下水道でも発電できる小型で効率的な発電機が製造されています。木、生ごみ、畜ふんなどのバイオマスは、固体・液体・気体燃料など多様な形でエネルギー利用されています。森林資源が豊かな日本では、木質系バイオマスのエネルギー利用を中心に太陽、水力、風力などを地域特性に合わせてうまく組み合わせなければ、地域で必要なエネルギーを地域で自給する“エネルギー自給圏”を作ることは十分に可能です。千葉大学の倉坂秀史氏はこのような地域を“エネルギー永続地帯”と名づけていますが、全市町村を対象にした彼の実態調査によればすでに62市町村が自然エネルギーのみで市町村内の民生用エネルギー需要(電力と熱)をすべて賄っています。

田辺・白浜地域は日照時間が長い

地域であり、新宮地域は日本有数の多雨地域です。また、「紀州木の国」と言われるほど森林資源が豊富な地域です。その意味で“熊野”はまさに自然エネルギーの宝庫であり、個別の市町村を超えて“熊野”というレベルで自然エネルギーによる地域自給を実現することは十分に可能だと思います。「熊野・自然エネルギー100パーセント地域宣言」は、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の価値を何倍にもアピールする力を持つでしょう。地域の公共交通としてのバスやトラックは廃食油を回収して精製したバイオ・ディーゼル燃料で走る、紀勢線の電車は風力発電事業者と連携して認証された電気で“風力電車”として走る、温泉の追い炊きや温室栽培では重油ボイラーではなくペレット・ボイラーが使われている、そのような“熊野”的実現が私の夢です。



## 『熊野』と自然エネルギー

# 地域の知恵に学び、地域を守る 地域づくり那智勝浦町

色川地域振興推進委員会会長  
百姓養成塾代表

原和男



兵庫県出身で1981年、那智勝浦町色川地区に移住し農業を始める。

2006年から色川地域振興推進委員会会長をつとめる。

色川地域振興推進委員会は、「豊かな村づくり」の実現に向けて、地域の区長会が中心になり1991年に組織された。そして、定住支援・研修・体験拠点となる滞在施設「籠ふるさと塾」の運営、「Iターン」者や定住希望者支援のために住宅・農地確保の仲介・斡旋などに取り組んできた。

2007年、新しい事業「百姓養成塾」もスタートした。これは、若者が高齢者から地域の暮らしや知恵などを学び、地域を守り続ける担い手に育ってもらおうというもの。

2007年度地域づくり総務大臣表彰(団体表彰)を受賞。

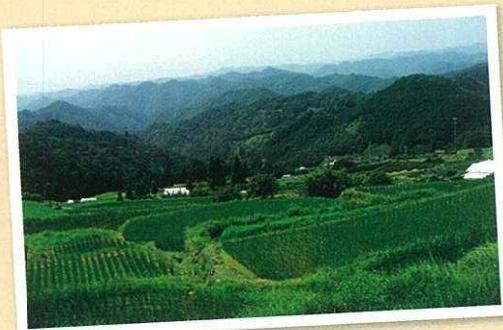
那智勝浦町色川地域は「Iターン」者が地域人口の3分の1以上に達しているということで有名ですが、ここに至るまで30年以上の年月を要しています。今でこそ「田舎ぐらし」がブームとなっていますが、30年前というと都会の人間を村が受け入れること自体非常にめずらしいことでした。そんな時代に色川地域には、移住を希望する人達の話を聞き、やり取りを重ね、受け入れのお世話までを決意し実行された有志の方たちがおられました。このことは特筆すべきことで、今の「Iターン」受け入れの流れも、この方たちが、もしおられなかつたら決してなかつたでしょう。その後、移り住んだ人達が有機農業運動を展開する中で多くの研修生の受け入れを行ったことが、この流れに大きく拍車をかけました。研修生の中から一人また一人と移住を決意する人が現れ、平成に入る頃には「Iターン」家族も十数軒を数えるまでに増えていました。そして移り住んだ人同士が「田舎ぐらしの会」といった活動を通じて都会に人に呼びかける動きを継続して行ったことが、そのあと地域全体で定住促進活動が行われていくうえでの大きな礎となりました。

流れを振り返れば、「人が人を呼び、人の輪がよりいっそう人を呼ぶ」の言葉に尽きます。ただ「村を守る」という視点に立つと、「Iターン」の受け入れは活動のほんの入り口に過ぎません。村の人が、先祖代々を語るとき、複雑な土地の境界をすぐに説明してくれるとき、お互いを小字名で呼び合っている姿を見るとき…村の重みと厚みと深みを思い知らされます。「村のこれまで」があつて「村の今」があります。

「村を守る」とは、きっとそんな思いの流れが、途切れる事なく繋がってい



るということなんだろうと感じています。村のこれまでの暮らしの大切なものを見つめようとする若者を集めて一昨年「百姓養成塾」をスタートしましたが、昨年からは、より裾野を広げられればと「むらの教科書づくり」事業を開始しました。手を挙げる若者が少しずつ増えてきているのを見ながら、「村を守る」流れは、決して不可能ではない。そんな予感がしてなりません。



## 「江戸と新宮」をテーマに、直木賞作家・山本一力氏が講演。



人気作家山本一力氏の講演会「時代小説から読み解く江戸と新宮」が、2月7日(土)午後1時30分から新宮市春日にある新宮市職業訓練センター大ホールで開かれる。(新宮市教育委員会、新宮商工会議所、きのくに活性化センターが後援)

これは、きのくに活性化センターの提案で一昨年から始まった「川上不白とまちづくり」事業の趣旨に賛同した新宮ライオンズクラブが今年度事業として開く。

山本一力氏は1948年高知県生まれ、2002年『あかね空』で第126回直木賞を受賞。「空前の時代小説ブーム」といわれる現在のけん引役を果たす人気作家。

昨年出版された『いかだ満月』は七日船で結ばれていた熊野新宮と江戸を舞台にした小説で、熊野新宮という土地によせる山本氏の思いがうかがえる。また、近作の『粗茶を一服』は、テレビの茶道番組に出演するなど、氏の茶道への造詣の深さがうかがわれる。

当日は講演のあと、佐藤新宮市長らも加わり和歌山大学の鈴木准教授の司会でトークショーが開かれる。そのほか、山本一力氏のサイン会と盛り沢山。講演会は入場無料。

### きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、以下の団体・機関で構成されています。

(2009年1月1日現在)

- 田辺周辺広域市町村圏組合
- 新宮周辺広域市町村圏事務組合
- 田辺商工会議所
- 新宮商工会議所
- 紀南農業協同組合
- 和歌山県
- 和歌山大学

## 「熊野地域検定」公式テキスト—今春刊行をめざす!

紀伊山地の霊場と参詣道がユネスコの世界遺産に登録されてから今年7月で5周年。

田辺商工会議所は、熊野地域の魅力を観光客や県外に発信するとともに地元住民にも地域をより深く理解してもらうことを目的に地域検定を計画、そのための公式テキストを作成する。

そのため、田辺商工会議所、田辺市、田辺市教育委員会そしてきのくに活性化センターの4者で「熊野地域検定検討委員会」(委員長濱岸宏一・事務局商工会議所)を設け作成に向けての作業を進めている。

内容は、田辺市以南の自然、歴史、熊野三山信仰、美術工芸、祭り・年中行事、産

業、特産、食文化、地域づくり、人物誌など幅広い分野の情報を盛り込む方針で、約40人の専門家・研究者らに依頼し執筆作業を進めている。

刊行は今春を予定。



熊野地域検定検討委員会開催風景、田辺商工会議所会議室で

## Big・U遊祭をプロデュース

きのくに活性化センターは、2008年11月1、2日に田辺市新庄町にある和歌山県立情報交流センターBig・Uで開催された恒例イベントU遊祭で企画協力をし、数多くの行事をプロデュースした。

そのひとつが着ぐるみキャラクターによる地域PRと交流の「和歌山のゆるきゃら大集合」。これは滋賀県彦根市の「ひこにゃん」など最近全国各地で起きているゆるきゃらブームに着目したもので、白浜町の「ウーミン」や田辺市の「たなべえ」、和歌山競輪の「わかちゃん」など7団体から10体が集合し、親子連れなどの人気を集めめた。

また、北山村在住で「天才マジシャン」として注目されるは三重県木本高校3年原大樹さんによるマジックショーや地元の作家によるチャリティーアートマーケットのほか、一昨年に引き続き和歌山大学の女子学生らの協力で地元の果物や野菜を集めたきのくにの収穫祭などを開き、各会場とも多くの来場者でにぎわった。



ゆるきゃら大集合



アートマーケット風景



収穫祭風景

## 編集後記

「100年に一度」という未曾有の世界同時不況のなかで新年がスタートした。

暮らしさ?

地域社会は?

紀南地方は?

そして日本はどうなるのか?

この混乱・混迷・困難な時代のなかで地域をどう生きるか。新春号はそうした観点から編集した。地域から立ち上がりましょう。

(す)

